

AI講座第0回

未来を創るAIと賢く付き合う方法

AIについての基礎知識から実践的な活用法まで、
初心者の方にもわかりやすくご紹介します。

定着採用株式会社 長谷川 洸



はじめに

AIの浸透

近年、「AI」という言葉を耳にしない日はないほど、社会に急速に浸透しています。

講座の目的

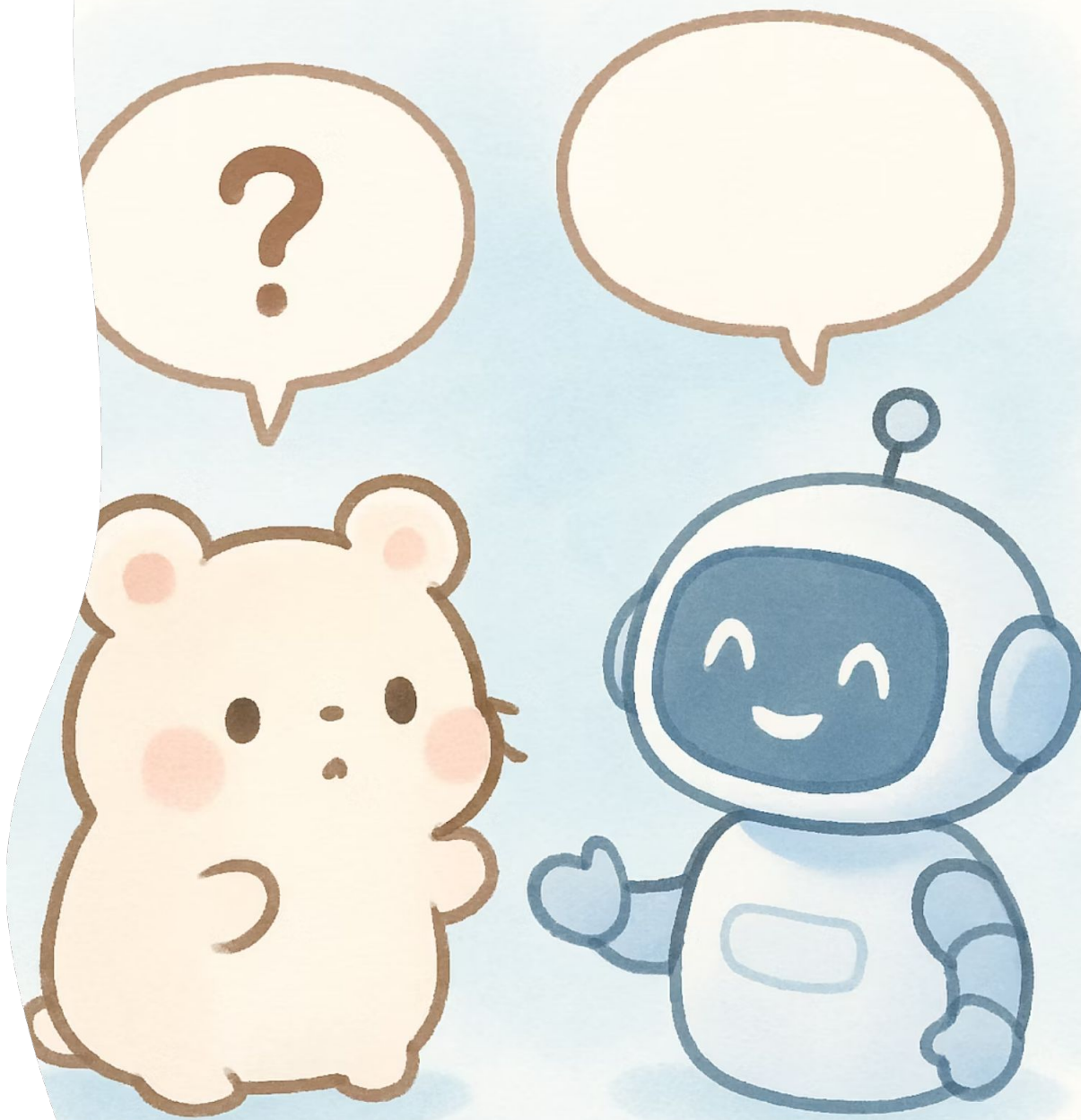
AIに「出来ること」と「出来ないこと」の境界線を知ります。

ファクトチェックの重要性

AIが生成する情報の「ファクトチェック」の重要性を理解します。

講座の約束

AIに対する漠然としたイメージが明確になり、AIと賢く付き合う第一歩を踏み出せます。



パート1: AIの基本概念

AIという言葉は非常に幅広く使われていますが、まずはその基本的な概念から理解を深めていきましょう。

AIとは何か

人工知能 (Artificial Intelligence) の略称で、人間の知的な振る舞いを人工的に再現したものです。

身近な存在

私たちの日常生活の様々な場面ですでに活用されています。

理解の第一歩

AIを特別なものではなく、身近なテクノロジーとして捉えることが大切です。



AIの身近な例



顔認証

スマートフォン
での顔認証シ
ステム



お掃除ロ
ボット

自動で部屋を
掃除するロボッ
ト



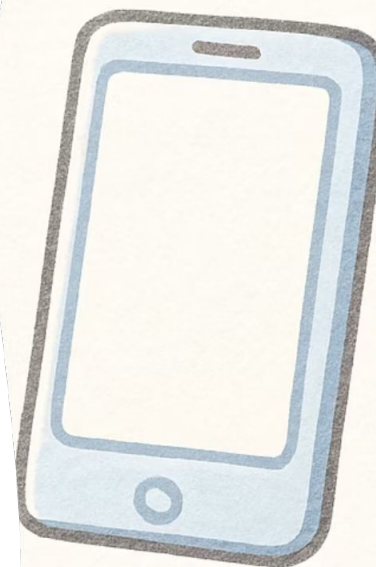
おすすめ商
品
ネットショッピン
グでの商品推
薦



スマートス
ピーカー

音声で対話す
るスピーカー

実は私たちの生活の様々な場面でAIはすでに活用されています。まずはAIを身近な存在として捉え直してみましょう。



AIの定義: AIは「考える機械」?

AIの定義

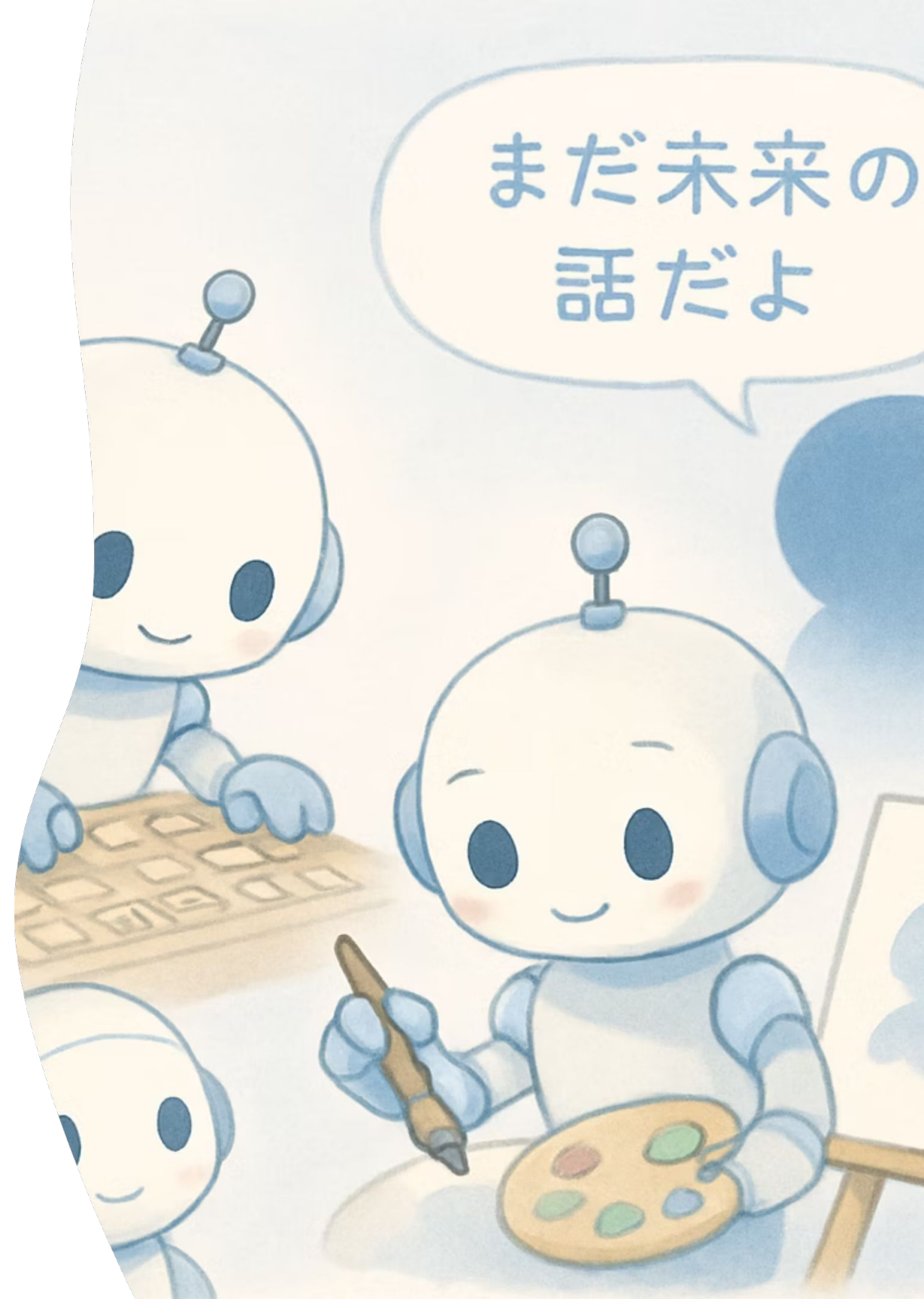
AI(人工知能)とは、「人間の知的な振る舞いの一部を、コンピュータプログラムを用いて人工的に再現したもの」です。

特化型AI

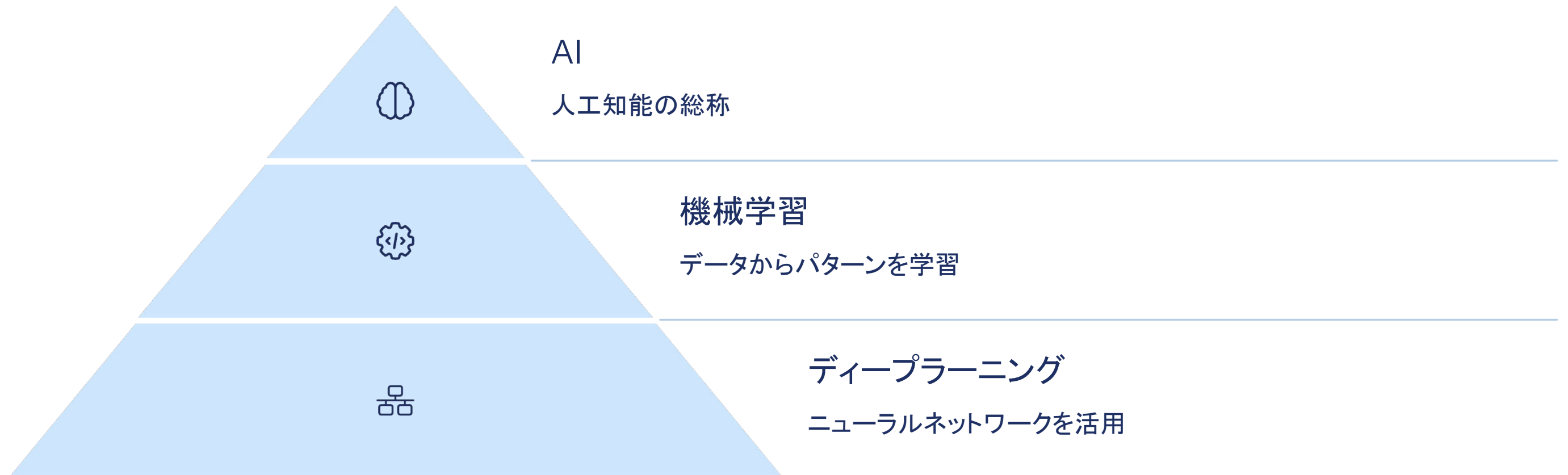
現在のAIのほとんどは「特化型AI」です。画像認識や翻訳など、特定のタスクに特化して能力を発揮します。

汎用AI

ドラえもんのような、感情を持ち、あらゆることを自律的に考え行動する「汎用AI」は、まだ実現していません。



AIを支える技術: 機械学習とディープラーニング



機械学習はコンピュータが大量のデータからパターンやルールを自ら学習する技術です。例えば、大量の「犬」の画像を見せることで、「犬らしさ」を学びます。

ディープラーニングは機械学習を発展させたもので、人間の脳の神経回路網を模した複雑な構造を持っています。これにより、より複雑で高度な判断が可能になりました。

AIの得意なこと AIができることの具体例

特化型AIは、具体的にどのようなことが得意なのでしょう。代表的な4つの能力を例に見ていきましょう。

認識

目や耳のように働くAI

予測

未来を見通すAI

実行

ルールに基づいて動くAI

生成

新しいものを創り出すAI





【認識】目や耳のように働くAI

画像認識

- ・ 顔認証
- ・ 不良品の検知(工場のライン)
- ・ 医療画像の診断支援
- ・ 自動運転における障害物や標識の認識

音声認識

- ・ スマートスピーカーへの指示
- ・ 議事録の自動文字起こし
- ・ リアルタイム翻訳

【予測】未来を見通すAI



おすすめ表示

ECサイトや動画配信での「おすすめ」表示



天気予報

天気予報の精度向上



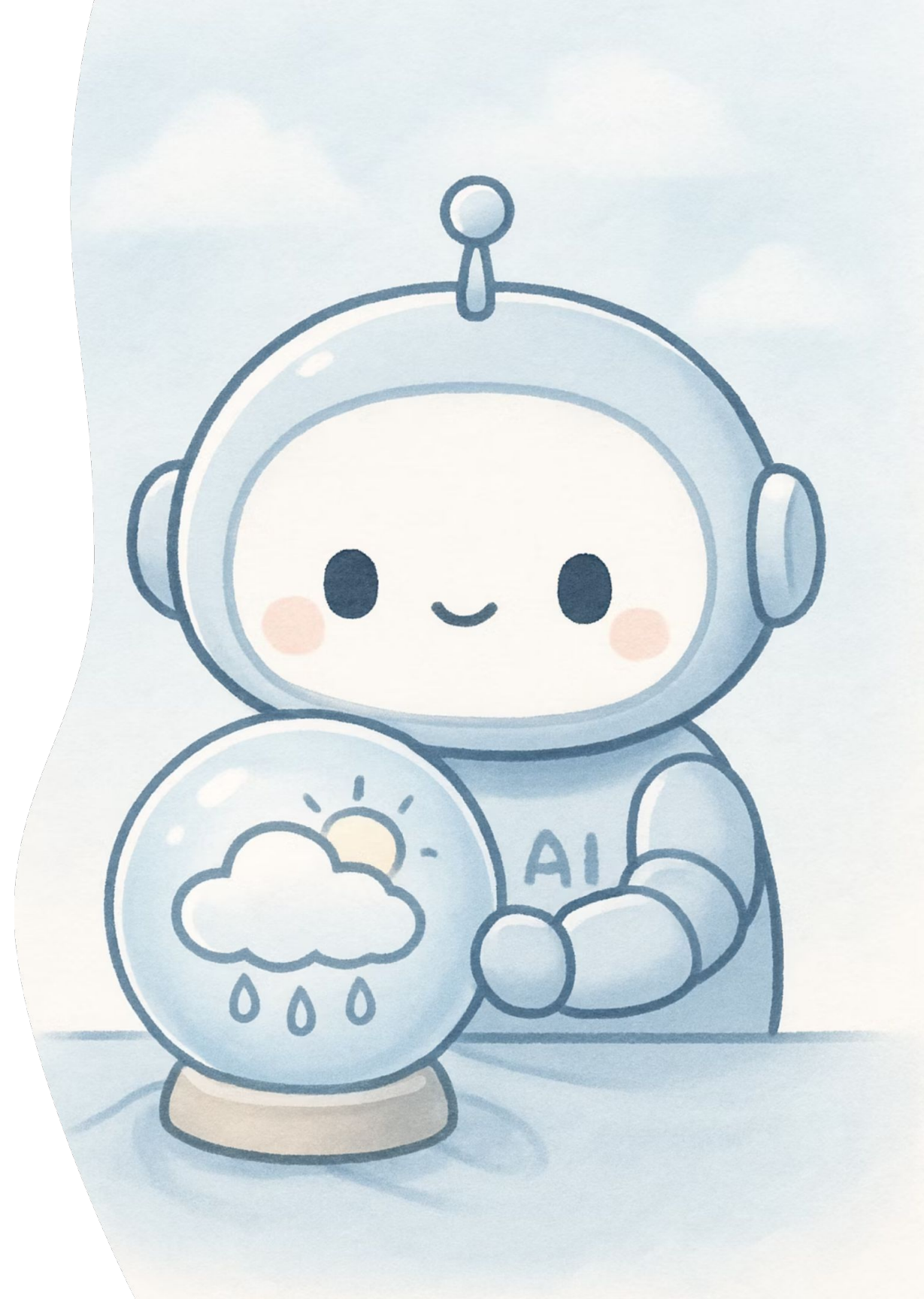
売上予測

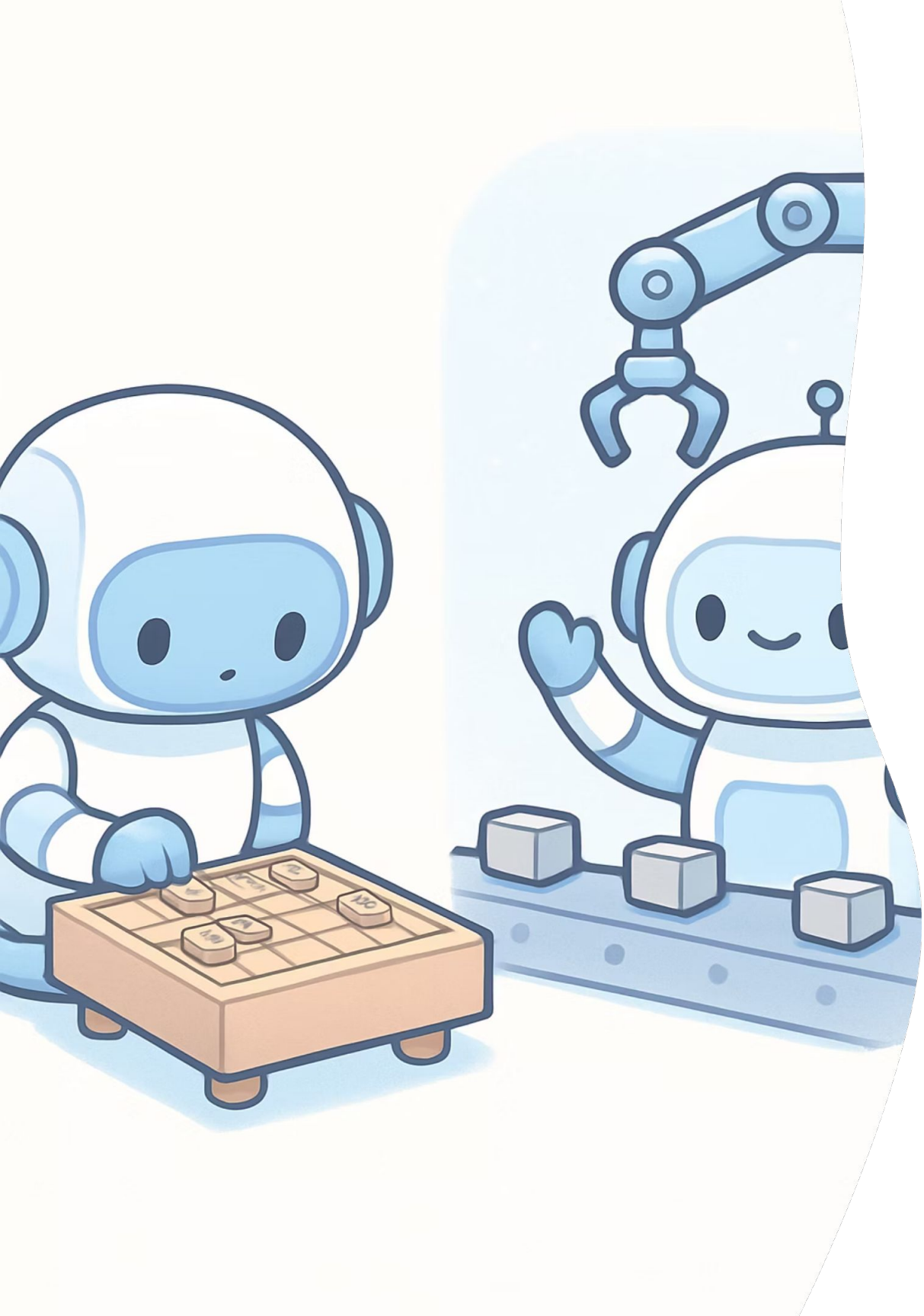
店舗の来客数や売上の予測



渋滞予測

交通状況の予測





【実行】ルールに基づいて動くAI

ゲームAI

囲碁や将棋でプロ棋士に勝利する
AI

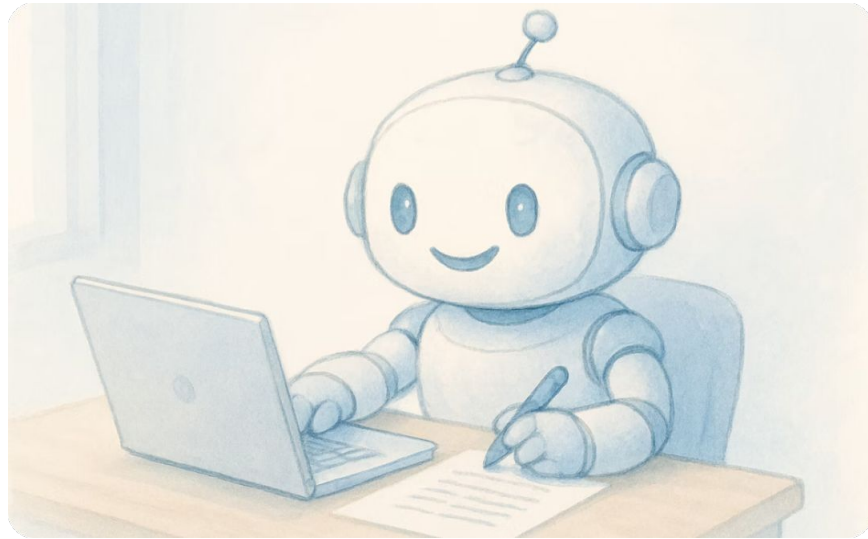
産業用ロボット

工場の産業用ロボットの制御

業務自動化

RPA (Robotic Process Automation) による定型業務の自動化

【生成】新しいものを創り出すAI (生成AI)



文章生成

メールやレポートの作成、アイデア出し、要約、翻訳



画像生成

キーワードからイラストや写真を生成



音楽生成

好みの雰囲気 of BGMを作成

AIの苦手なこと AIの限界と課題

AIは万能ではありません。人間には簡単でも、AIには難しいこともたくさんあります。



真の創造性

0から1を生み出す創造



文脈理解

常識的な判断



未知への対応

データのない事象への対応



倫理的判断

価値観に基づく選択

0から1を生み出す「真の創造性」



データの再構成

学習したデータの組み合わせ



パターンの模倣

既存パターンの応用



独創性の限界

全く新しい概念の創出は困難

生成AIは、学習した膨大なデータから「それらしいもの」を再構成しているに過ぎません。全く新しい概念や、誰も思いつかなかった独創的なアイデアを自発的に生み出すことはできません。

文脈の理解と常識的な判断



言葉の裏

「空気を読む」ことが苦手



冗談の理解

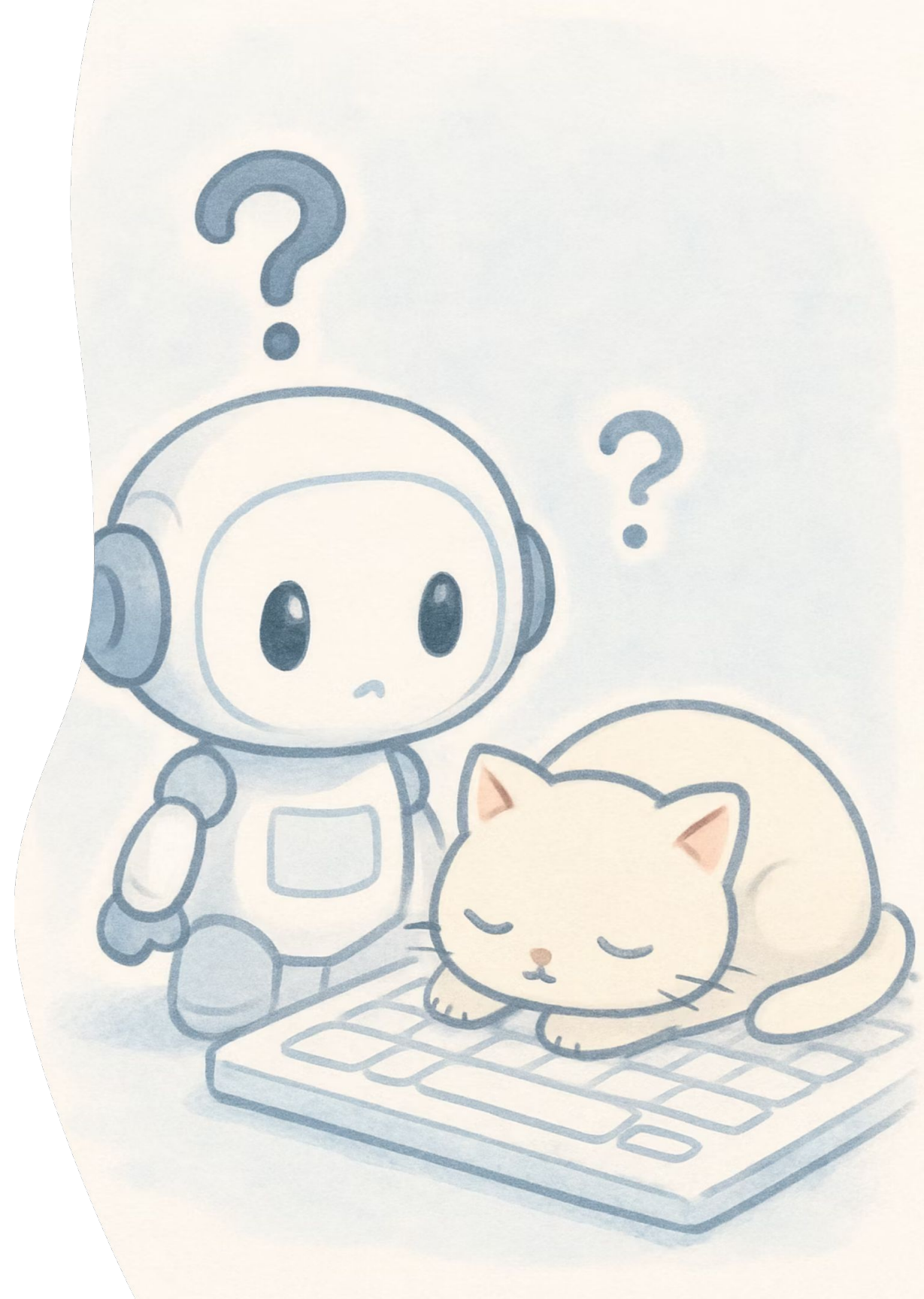
ユーモアの理解が難しい



比喩表現

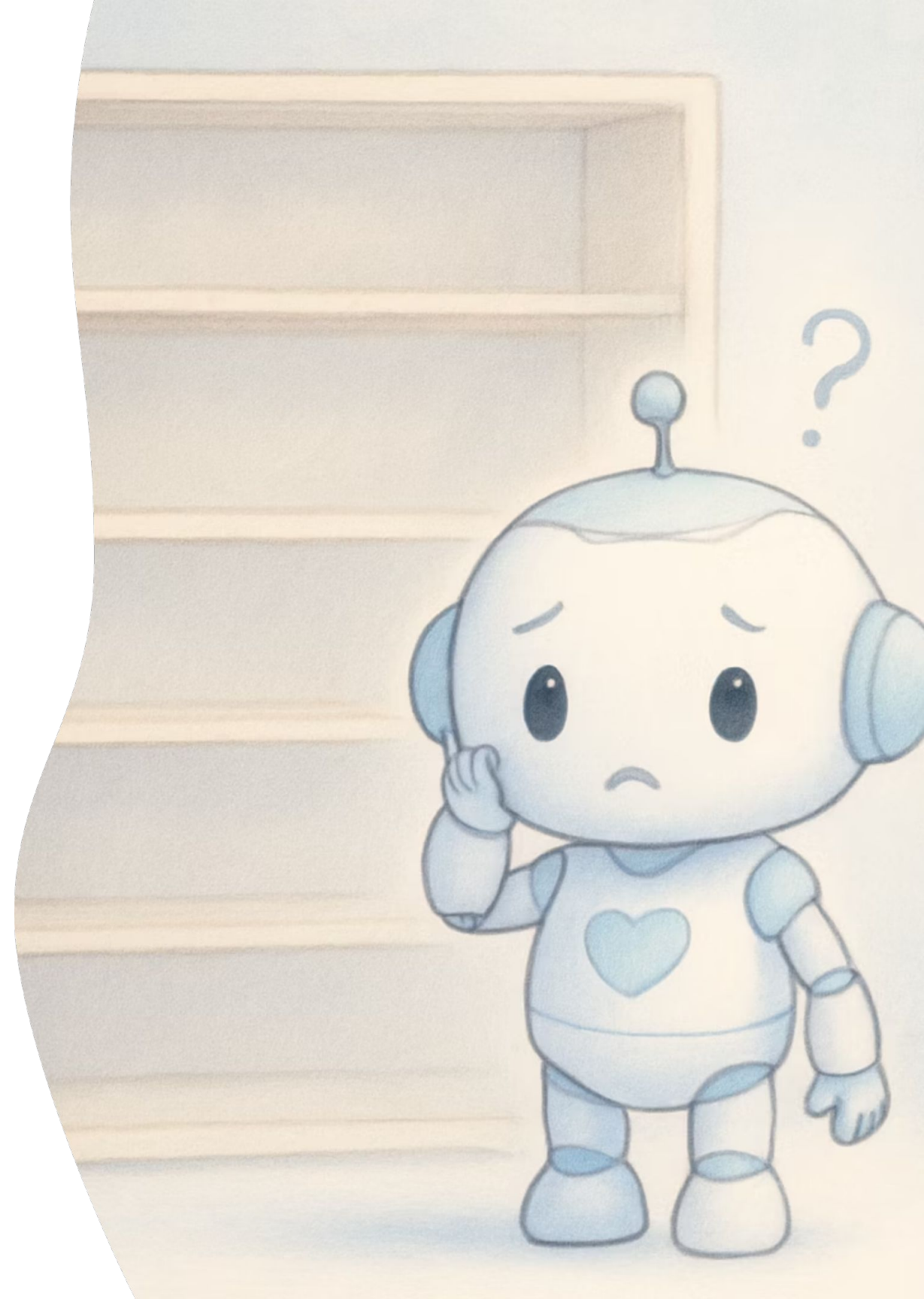
文字通りに解釈してしまう

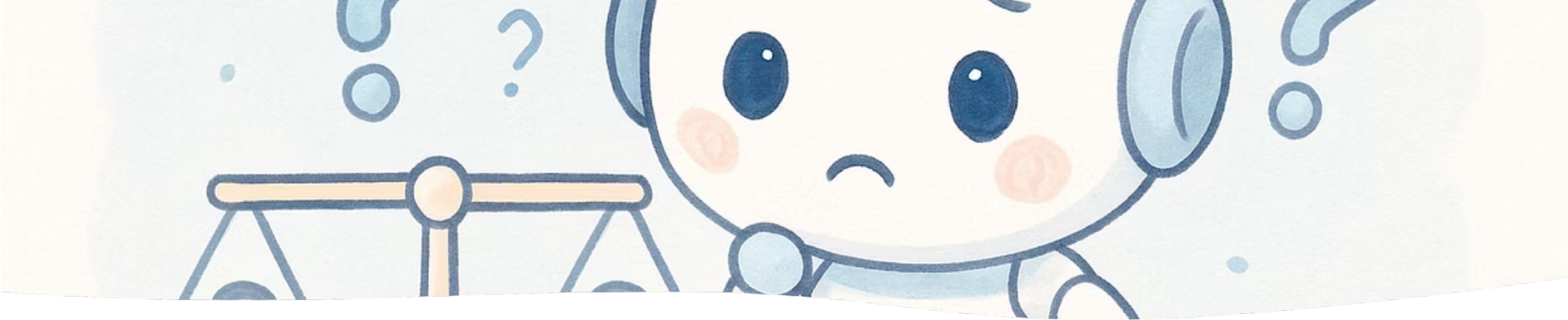
「空気を読む」「行間を読む」といった、言葉の裏にある意図や状況を汲み取ることが苦手です。そのため、冗談が通じなかったり、比喩を文字通りに解釈してしまったりすることがあります。



データの存在しないことへの対応

AIは過去のデータから学習するため、前例のない出来事や、データが極端に少ない分野については、正しい判断や予測ができません。





倫理的な判断と責任

1 倫理的判断能力

何が正しくて何が間違っているか、という倫理的な価値判断はできません。

2 人間の責任

最終的な責任は、AIではなく人間が負う必要があります。

3 難問への対応

自動運転車の事故回避など、難しい問題に答えることはできません。



ケーススタディ: 訪問看護報告書作成から見るAIの苦手なこと

-  ニュアンス理解の限界
看護記録の「行間」やニュアンスの読み取りが苦手です
-  創作の危険性
記録にない情報の「もっともらしい」創作をしてしまいます
-  専門的判断の欠如
医療・看護専門職としての重要度の判断ができません

AIは報告書作成の時間を大幅に短縮できますが、あくまで強力な「下書き作成アシスタント」です。その内容を鵜呑みにすることはできません。



ファクトチェックの重要性

パート4: AIと上手に付き合うために ～ファクト

AIが生成したアウトプットを鵜呑みにせず、人間が「ファクトチェック」を行うことが極めて重要になります。



なぜファクトチェックが必要なのか？

ハルシネーション (Hallucination)

AIは、事実に基づかない「もっともらしい嘘」を、あたかも事実であるかのように生成することがあります。

情報の偏り(バイアス)

AIの学習データに偏りがあると、生成される内容にも偏見(ジェンダー、人種など)が含まれる可能性があります。

著作権・プライバシーの問題

AIが学習したデータに著作物や個人情報が含まれている場合、生成物がそれらの権利を侵害してしまう可能性があります。

悪用のリスク

フェイクニュースや偽画像の生成など、悪意を持ってAIが利用されるケースも増えています。



具体的なファクトチェックの方法



複数の情報源で確認

AIが出した答えを、元の資料や専門サイト、書籍などで裏付けを取りましょう。



情報の出どころを探す

統計データであれば政府機関の発表、ニュースであれば元の報道機関など、情報の源流をたどることが重要です。



AIに情報源を尋ねる

AI自身に「その情報の出典は？」と尋ねることも有効ですが、その出典情報すら偽っている可能性も念頭に置きましょう。



自分の知識と照合

「何かおかしいな？」という専門家としての直感を大切にしましょう。

AI利用の心構え



AIの位置づけ

AIは「賢いアシスタント」であり、「全知全能の神」ではないと認識する。



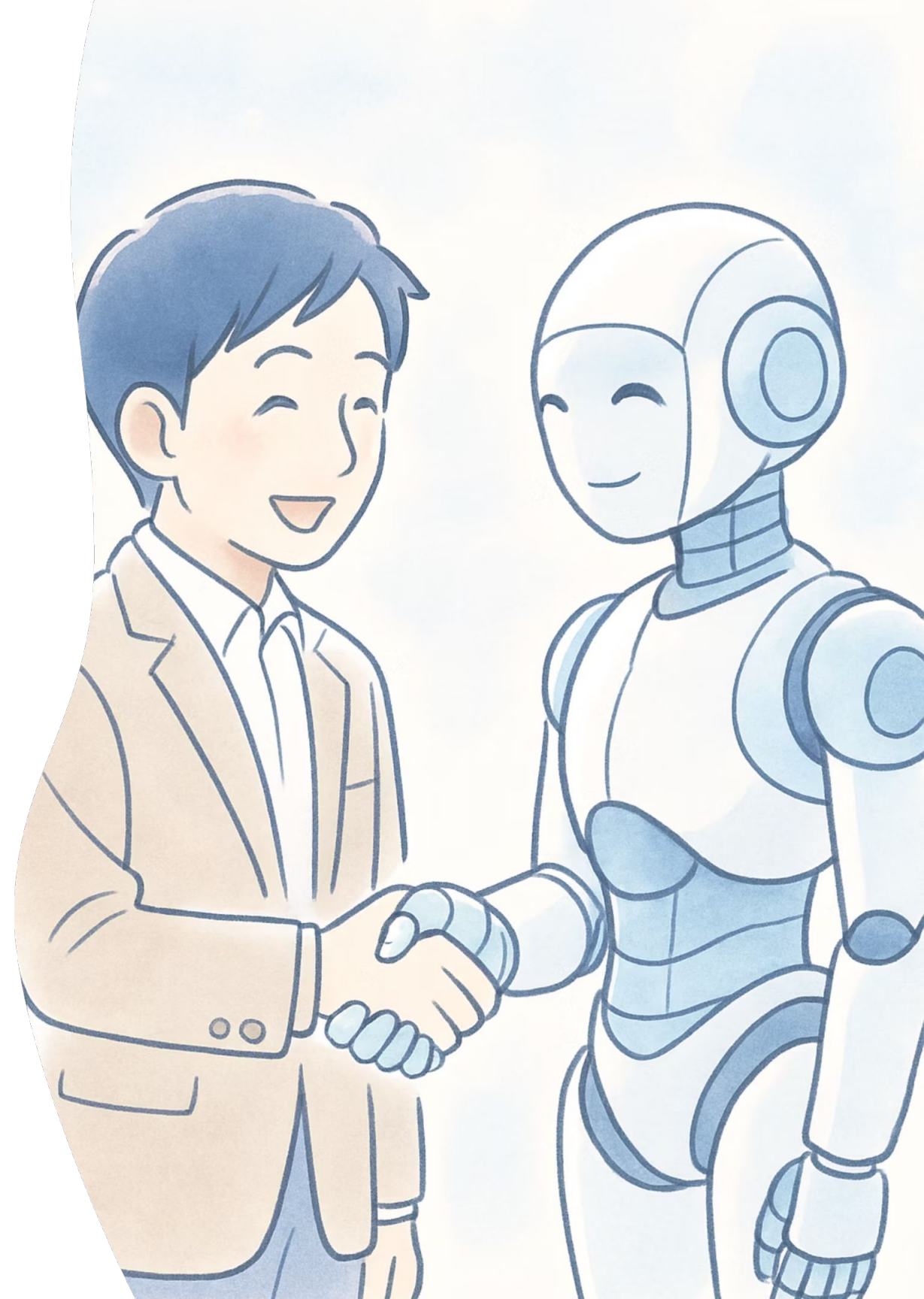
責任の所在

最終的な判断と責任は必ず人間が持つ。



情報セキュリティ

個人情報や会社の機密情報など、公開されてはいけない情報は入力しない。





まとめ: AIは未来を映す鏡

AIの可能性

AIは、私たちの仕事を効率化し、新しい創造性を引き出してくれる強力なツールです。しかし、その一方で限界やリスクも抱えています。

賢い利用法

AIを正しく理解し、その特性を踏まえた上で賢く利用すること。そして、AIが示す情報を鵜呑みにせず、常に自分の頭で考える姿勢を持つこと。

未来への展望

この2つが、これからのAI時代を生き抜く上で非常に重要になります。AIは、私たちの社会や知識を映し出す「鏡」のようなものです。鏡に映った姿をどう活かすかは、私たち人間次第なのです。



ご清聴いただき、誠にありがとうございました

ご清聴いただき、誠にありがとうございました。AIについてのご質問がございましたら、お気軽にお尋ねください。



理解度

AIの基本を理解できました



可能性

AIとの共存の可能性



第一歩

AIと賢く付き合う第一歩